

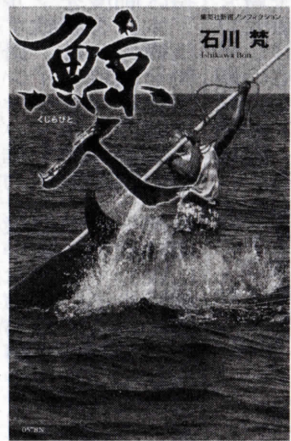
評・三浦 佑之（古代文学研究者）  
立正大教授

久しぶりに、ページを繰るのももどかしいという胸躍る読書を体験した。滅法おもしろく、読後には切なさを噛みしめたくなる本だ。

理由は二つ。一つは題材。現地語でイカンパウス（鯨の王様）と称えられるマッコウクジラの背中をめがけ、銚もりを挟んだ長い竹竿たけざおを振り上げた男が突撃する、にわかには信じられない太古さながらの鯨漁を追い続けたドキュメンタリーである。とにかく迫力満点だ。

舞台は、インドネシアのバリ島からいくつもの島を東に渡った先にあるレンバタ島のラマレラという小さな漁村。手作りの手漕ぎ帆船プレ

## 太古さながら神聖な戦い



ダンに乗り、村の前に広がる大海原に漕ぎ出した10人ほどのマトロス（乗組員）とラマファ（銚打ち）とが、心を一つにして巨鯨と対峙する。それは人と神との神聖な戦いであり、村人の生活を支える日常でもある。しかし、獲れるのは平均して年に10頭ほど。当然、村は貧しい。

本書のもう一つの魅力は、写真家・石川晃氏の信じた執念であり、ラマレラの人々とマッコウクジラとに向けられた求道者のごとき崇高な眼差しである。浮かびあがるのは、死に向かつて懸命に生きる人々と鯨たちの姿だ。

ラマファが鯨を仕留める瞬間を撮るのに、4年もの歳月を要した。その労苦が報われて国内外で名声を得ながら、著者が凄いののは、その後3年をかけて、殺される「鯨の心」をファインダー越しに求め続けたことである。その心とは何か、ぜひ本文を読んでほしい。

最後には、2010年に13年ぶりに訪れた村の様子も記され、それが切なさをより深く刻み込む。当然だが村は変貌し、ここにまで捕鯨反対運動の活動家が入り、若者には携帯電話も普及する。それら押し寄せる現代は、世代間ギャップも連れていた。

◇いしかわ・ほん 1960年生まれ。AFP通信社を経てフリーに。内外の主要誌で作品を発表している。

## 鯨人

石川晃著

集英社新書 780円